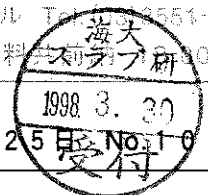


ロシア 東欧 経済速報

社団法人 ロシア東欧貿易会 〒104-0033 東京都中央区新川1-2-12 金山ビル TEL 03-5551-6218
ロシア東欧経済研究所 <http://www.rotobo.or.jp> [年間購読料・送料 1,000円]



1998年(平成10年)3月25日 No.1086

目次

1997年のCIS諸国の経済.....	1
—大半が成長に転じるも、一部で錯綜した動き—	
統計速報.....	11
1997年のロシアの石油会社別原油産出量/11	
データフラッシュ/11	
キーパーソン.....	11
イングーシ共和国でアウシェフ大統領が再選/11	
ホームページ拝見(20) ネムツォフ・ロシア第一副首相.....	12
CIS諸国通貨の最新為替レート.....	12

1997年のCIS諸国の経済

—大半が成長に転じるも、一部で錯綜した動き—

はじめに

CIS統計委員会はこのほど、1997年のCIS諸国の経済実績を発表した。そこで本号では、このデータを詳しく紹介するとともに、CIS主要国(ウクライナ、ベラルーシ、カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、キルギス、アゼルバイジャン)の最新の経済事情についてレビューする。ロシアについては、本誌2月5日号(No.1081)をご参照いただきたい。

CISではすでに1996年に、ほとんどの中央アジア諸国、コーカサス諸国がプラス成長に転じていたが、1997年には最大の経済規模を誇るロシアのGDPもわずかながら上向いたため、CIS全体としてもようやくプラスの成長率を示した。統計が発表されている国のなかでは、ウクライナだけが依然マイナス成長となっており、それ以外の国はすべてプラスに転じている。また、アルメニアを除くすべての国が、1997年に前年を上回る成長率を記録している。もっとも、データの発表されていないトルクメニスタンは、天然ガス輸出の停止により、大幅なマイナス成長に陥っていることが確実視される。

全体としてみれば、一見好転しつつあるCIS経済だが、一部では錯綜した動きもみられる。ベラルーシでは水膨れ経済が破綻を迎えつつあるし、ウズベキスタンの権威主義近代化路線も色あせはじめた観がある。成長要因が資源開発(およびそこへの外資導入)しかないという国も少なくなく、各国の成長基盤が必ずしも安定しているとは言えないのが気がかりである。